
極楽蝶

庵あん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

極楽蝶

【Nコード】

N9914Y

【作者名】

庵あん

【あらすじ】

死者の口から吐き出された吐息は、蝶となって舞い、ヘルメスに導かれ冥府へと堕ちてゆく。ひらり、ひらり、と。

白亜の時計塔は、午後三時を報せた。

赤い広場。碧い葉を纏う大きな銀杏の枝から、鳩が一斉に飛び立つ。羽音は遠く、溶ける様な青い蜜の中へ。その白い翼が向かう先。天空まで打ち付ける音の波紋は、赤煉瓦造りの街に大きく反響する。荘厳に、鐘の音は響いた。

赤い煉瓦の広場、時計塔の向かい側。街で最も高い建造物と同じ、ゴシック様式で建築された純白の教会。極彩色のステンドグラス。ヴァーミリオンで纏められた内装。その血よりも深い紅の絨毯の上で、祭壇と向き合う彼は緋色の装丁がなされた古い聖書の、浅紅に変色したページをめくる。

背後で扉が開いた。

若い牧師は振り返る。紫色の瞳をした若い女が肩で息をしていた。彼女の形の良い艶やかな朱い唇が震える。

「大変、ローズがいないの！」

「何ですって？ どちらか心辺りは？」

「分からない。けど、きっと、あの鴉女の家よ」

「ミス・フリーゼ」

黒衣の牧師は、礼拝堂の椅子に座る金色の髪的女と、その隣のメイドを見た。

「案内していただけるかしら？」

極楽蝶

B L A C K M I S S I L E b e f o r e t h e H e x e
n n a c h t

その魔女が住む家は揚羽屋敷と呼ばれ、赤い街の住人からは忌み嫌われていた。魔女の住む家として。郊外に位置するその邸宅の、室内の壁という壁には古今東西、洋の東と西を選ばずに蒐集された蝶の標本が架けられている。山間に生息する淡い色彩も、甘い夢の様な南国の色彩も、白い壁を埋め尽くす程。そして、中庭では年間を通して色鮮やかな花々が生い茂り、実に様々な彩りの蝶たちが飛び交っていた。

蛭蝶、紋白蝶、揚羽蝶、立羽蝶、蛇目蝶……。

千紫万紅の翅がひらり。ひらり、と風に遊ぶ。それは神話の中に登場する、小鳥の囀る神々の庭の様に。はなやかに。

黒のロングブーツが赤煉瓦を鳴らした。

そんな楽園の中心で如雨露を持った黒揚羽が、その黒い爪で墨色の裾を持ち上げる。

「イザベラ様、これは何て言うの？」

「それは孔雀蝶ですよ。翅の表が孔雀の飾り羽根のようで綺麗でしょう？」

「うん。でも、裏側は真っ黒ね」

「表側の模様は鳥から身を守るため、裏側が黒いのは森に隠れるため。蝶の翅はただ美しいのではないのです」

そう言つて、魔女は少女の頭を優しく撫でる。

向日葵が咲く様に彼女は微笑んだ。

ギリシア語のプシュケーという単語は幾つもの意味を持つ。ひとつは魂。ひとつは吐息。そして、蝶。人が死を迎えた時、その魂は吐息となって死者の口から抜け出し、蝶となって空を舞うのだ。それはヘルメスによって導かれ、ひらりひらりと舞いながら冥府へと堕ちていく。

彼女はそんな蝶の蒐集家だった。

そう、この邸宅の壁を埋め尽くす蝶の標本の、その全てが、総ての色彩が、すべての美しい翅が、死者の軀から吐息となって抜け出たプシュケーなのだ。

その赦されざる行為は、秩序と司法、そして倫理を司る魔女帝の耳にも届いていた。

だからこそ、彼女は差し向けられた。魔女を狩る魔女として。或いは、死刑の執行人として。

緋色のフードを目深に被った金色の髪の魔女が、揚羽屋敷の戸を叩く。

「どちら様ですか？」

艶やかな黒髪の華奢な少年がドアを開けた。

「はじめまして。さようなら」

刹那、繊細な銀色の刀身が彼の心臓を貫く。
引き抜いた。

力無く、青い瞳を閉じて、彼は膝を折る。その音は、招かれざる客の訪れと共に、中庭にいた黒揚羽の鼓膜を震わせた。それは、確かに羽音に聞こえた。

顔を上げる。

彼女の顔が強張った。声を失った。氷の様な青い瞳に、深紅の色が灯る。

その緋色の衣を纏うことは彼女にしか許されていない。蛇の眼を持つ遣い魔を従えた、金色の髪の盲目の魔女のみ、その執行人の紅い服を纏うことができる。

レリア・フリーゼ。

それは死の言霊として、或いは、金色の魔女として。魔女たちの間では畏怖の象徴だった。その姿とその名は、魔女にとって、瞬きをひとつする間に躯と首を分けて仕舞う、あの無愛想な機械そのものののだ。彼女の刃に魅入られた心臓は、それでも熱く、脈打つことが叶うだろうか。

「ご機嫌いかが？ イザベラ」

「イザベラ様、この人はだあれ……？」

「お友達ですよ。ローズちゃん、これから私はこの人とお話ししなくてはいけないので、また明日、蝶々のお話をしましょう」

「うん……。でも」

「明日は、ケーキを焼いて待っていますから。さあ、いつもみたい

に裏口から、ね」

「うん！ さようなら」

「さようなら。 気をつけてくださいね」

その幼い少女は、黒い魔女に言われるまま、中庭の向こうへと消えていった。数匹の蝶がその背中を追いかける。

彼女の背中を見送ってから、黒揚羽は視線を、紅い訪問者へ移す。

「……あなたが金色の魔女？」

「果たせない約束なんて、交わすべきではないと思うのだけど」

「噂通り、自信家なんですね」

「黒蝶の魔女イザベラ。皇帝アイヴィー・クロウリーの名を以て、あなたに死刑を告げます。最後に言い残したことは？」

「ところであの子はどうしました？ 私の使い魔のハルは？」

「すぐに会えるわ」

赤い靴が、赤煉瓦を蹴った。

レイピアの刃が瞬く。

緋色の衣は花園の中で舞った。真紅が翻って。その風が金色の髪を持ち上げる。

その銀色の棘は黒い魔女の左胸を貫いた。右手に力を入れ、刃を抜く。噴き出すであろう紅い鮮血の代わりに、魔女の胸からは、サラサラと虹色の鱗粉が零れ落ちた。ふわり、と一頭の蝶が彼女の軀から綻んだ。

黒い魔女の、黒い唇がニヤリと吊り上がる。

途端に、バラバラ、と一斉に彼女の身体を形成していた蝶が飛び立つ。七色の鱗粉を撒き散らして。極彩色の蝶たちが、青い空に浮かび上がる。青い空を覆い尽くす様に。

それは再び結集して、徐々に人の形を現し始めた。

その姿は先程、レイピアで突き殺したはずの、黒い魔女の使い魔だった。彼は少し首を傾けて、くすり、と笑った。幼く、けれど、妖しく。

その薄紅色の唇から、囁く様な羽音が聞こえた。

「ようこそ、揚羽屋敷へ」

「さあ、踊りましょう？ 金色の魔女さん」

艶やかに唄う黒い揚羽蝶が、レリアの背後で翅を広げる。

再び、遣い魔は蝶の群となって、その無数の蝶たちが集まって、二振りの優美な短剣に姿を変える。黒い魔女がその柄を逆手に握った。

そよ風が、頬を掠めてゆく。

それは恐らく、羽音と同時に、否、それ以上、速く、鋭く。無慈悲に。その美しい翡翠の刃を振り抜いた。ふわり、と執行人は身体を反転させる。彼女がユニコーンの角を模したレイピアを構えるより、疾く、黒衣の袖が翻った。青い花片は舞い上がって。深緑の葉を揺らして。

流れる様に、黒揚羽は標的の懐へと潜り込む。

「アイギス」

「はい、レリア様」

主人の呼び掛けに答え、メイドの格好をした少女が、黒い魔女と主人の間に割って入った。それは束と鐔にウロボロスの装飾が施された短刀で、翡翠の刃を受け止める。甲高い金属音が響いた。

盲目の魔女が、レイピアを構える。

彼女の使い魔が小さな短剣に姿を変えた。二匹の蛇とメデューサの瞳が飾られた短剣をレリアが逆手に握る。それこそが、彼女にとつてのアイギスだった。

右手のレイピア、左手のマイン・ゴーシュ。ある時から騎士は重い盾を捨て、短剣を左手に持つ様になった。それは攻守の一体化、そして、高速化のため。斬撃など受け流して、相手が二の太刀を放つよりも速く、一瞬で、相手の心臓を貫いて仕舞えばいい

それは蝶が羽ばたくよりも、速く。

レリアの神経が僅かな振動に反応する。

銀色の棘が、イザベラの頬を掠めた。それは緋色の風が通り抜けた様な軌跡を描いて。

白磁の頬の上、赤い血が溢れ出す。一筋、黒揚羽は赤い血を舐め取って。

「流石は、金色の魔女さんですね」

「負け惜しみ？」

にこやかに、挑発的に笑う魔女の、その首筋を目掛けて横一閃に薙ぐ。ひらり、と赤い魔女は身を逸らした。翡翠の風は鼻先を通り抜ける。黒い揚羽蝶は踊り子の様に廻って、鋭い刃を振るう。左手の短剣で、レリアはその変則的な剣戟を防ぐ。くるり、くるり、と。廻って。

蝶の様に。

黒いブーツが地を強く踏んで、金色の魔女の顔面を狙って、円を描く様に、蹴り込む。

確実に、しかし、堅実に放った一蹴だった。鋭い痛みが、イザベラの左脚を襲った。レリアはそれを受け止めると同時に、深く、短剣を突き刺していた。深く食い込んだ刃を引き抜く。その瞬間、目の前から緋色の魔女が消えた。音も無く、忽然と。

黒い魔女が眼を見開いた。

いつの間にか、自分を取り囲む様に、幾本かのレイピアがそこに浮いていたのだ。標本に蝶の翅を留める針みたく。それは静かに。その刃はただ一点を、黒い揚羽蝶の心臓を狙って。

雨の様に。

降り注ぐ

鱗粉を纏った美しい羽も、砂漠の熱と冷氣に灼かれて、砕け散って白い砂と化して仕舞う。

けれど、それさえも美しく仕立て直してしまうのだから、人の想像力というのは残酷だ。蝶となって自由な空へ解き放たれた物語は、白亜の砂の幾億の物語の中へと埋没する。それは流砂となって、時に人を呑み込んだ。

そう、物語さえも。そして、運命さえも。

その怨みの塊の様な流れには抗えない。

「ハル！」

黒い揚羽蝶の目の前には、自らの代わりに貫かれた使い魔。銀色の刃の先端を伝って零れ落ちる赤い血。ポタリ、ポタリ、と赤い煉瓦の上に反転を描いてゆく。

震える、真つ白な手のひらで黒い魔女はそれを受け止めた。それは、まだあたたかく。或いは、艶めかしい。

「イザベラ様、止してください。……御手が汚れて、仕舞います」

「どうして、どうしてあなたが……。あなたに、罪はないはずです」

「どうして、って……。当たり前じゃないですか、僕は、あなたの使い魔ですよ？」

「……バカ」

「相変わらず、酷いや……」

微かに、笑った。

少年の軀から、一気にレイピアが引き抜かれる。鮮血が舞った。ふわり、と力無く、しかし、確実にその使い魔は、翼を畳んだ。彼の名を叫んで、彼の血に染まった手で、魔女は少年を抱き留める。そして、抱きしめる。

「アイギス、告別の時間をあげなさい」

「はい。レリア様」

メイドの手から放たれた一匹の黒い蛇が、黒髪の少年の胸の傷から体内へ侵入する。

途端に出血が止まった。そして、痛みさえも……。

白く、細い指先が、黒い魔女の顔筋をなぞる。

「イザベラ様、覚えていますか？　あなたが、魔女に、なれた日のこと。初めて、出逢った日のこと」

「ええ……」

「最悪、でしたよね」

「もっとかわいい使い魔がいい、なんて。私は我が儘なこと言っ
て仕舞いましたね」

「はい……。今でも忘れません」

「ごめんなさい、ハル……」

「いいんです。これでやっと……、そんな我が儘な、あなたから解
放される」

「本当にごめんなさい。私の我が儘で、こんなことに、なっ
てしま
つて」

「……本当ですよ。本当に、あなたは、我が儘な人です……」
彼は魔女の手を握って。「でも、あなたに逢えて、あなたで、…

…本当に、よかった」

「ハル……。いつも、こんな私の傍に居てくれて、本当にありがとう」

「当然、ですよね……」

「うん……。ごめんね。私もあなたに逢えてよかった。本当に、今まで、ずっと、ずっと……」

「そんな顔、しないでください。イザベラ様」

「……だって」

「最後に見るあなたの思い出は、笑っている顔のあなたで……」

「……うん」

「僕の、我が儘を……」

「ええ……」

「どうか、笑って……」

「ねえ……。ハル？ 見える？ こうで……。こうでいいかしら……」

「ありがとう、と。」

小さく、彼は頷いた。そして、やさしく微笑んで、そのまま、静

かに目を閉じた。

魔女の頬を伝った涙は、自らの赤い血と混ざり合って。

白い顔に紅を刺して。それは、死化粧みたく。

華やかに。

蝶の翅の様に。

「レリアさん……、この期に及んで、図々しいかと思いますが、望むだけなら、望んでも構いませんか？」

「聞くだけなら」

「どうか、私とこの子の思い出を、一緒に、すべて、焼き払っていただけませんか？」

「我が儘ね」

「……ごめんなさい。ですが、どうか、どうか、この願いを……」

「くどい」

血よりも深い、緋色の衣を纏った魔女は、深く、深く、我が儘で心優しい魔女の心臓を貫いた。悲しみも、憎しみも、愛さえも串刺しにしてきた銀色の刃で。

何よりも冷たい刀身が、最期の羽音に共鳴する。

忽ち、三千の色の蝶が飛び立った。

それは、溶ける様な蒼い蜜の中へ。高く、どこまでも高く。

その蝶たちの羽音が遠くなる音を聞いて金色の魔女は、折り重なる様に息絶えた魔女と使い魔の亡骸を前に、ふわり、と踵を返す。

空の縁は茜色を帯び始めていた。

「あの、レリア様。今回は……」

「早く、喰らいなさい、アイギス」

「ですが……」

「命令」

「……はい」

花園に巨大な蛇の影が現れる。

それは大きな顎で、使い魔の死肉を食った。骨を砕く音が揚羽屋敷に響く。

夕暮れの花園。ひらり、ひらりと、黒い揚羽蝶は舞って。

黒い魔女の頬に留まる。

夕闇と黒い影の縁で、もう一度、緋色の衣を纏った魔女はその羽音を聞いた。

その焰は、段々と、揚羽屋敷を包んでいく。その火の粉は、無数の蝶となって、茜色の空へと昇ってゆく。魔女に捕らわれた、幾千、幾万の物語たちが、追憶の故郷を目指して。羽音を立てて。

紅く、絳く、昇ってゆく。

是に於て了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9914y/>

極楽蝶

2011年11月29日22時45分発行